



淡路の人形浄瑠璃を見る

朝 田 祥 次 郎

五月十、十一の兩日、淡路西浦の漁港富島で郷土の名物

人形浄瑠璃の興行があつたのを見物した。劇場は富島座、

主催は土地の警防團、出演は志築の淡路源之丞一座、演目

は、

十日 先代萩

三十三間堂

太功記

白石噺

伊賀越

天網島

玉藻前

十一日

阿波鳴門

太功記

忠臣藏

合邦辻

政岡忠義

平太郎住家

十段目

楊屋

沼津里

時雨炬燵

道春館

巡禮唄

十段目

六段目

合邦内

千本櫻

すし屋

野中隠井

聚樂町

忠臣藏

九段目

語り手は京阪神の素養の大家連との觸れこみである。三味線は兩夜を通じ唯一人の女の弾き手が弾きまくつてゐたやはり人形に異色がある。文樂を見慣れた眼からは、なかなか珍奇なみものだ。

人形の遣ひ手——淡路で役者と呼ばれる——達の遣ひ方にも、もとより文樂の巧緻、洗練はない。併し決して未熟なのではない。淡路人形が文樂のよりは一まはり二まはり大きい事はよく知られてゐるが、いかにもその大きさに相應して潤達な、これはこれで味のある遣ひぶりである。

片山兵吉（座主源之丞）が先づ流石に老練だ。揚屋の信夫、炬燵の小春、玉三の萩の方、聚樂町の小梅など女物ばかり遣つて見せた。瀧口上野や松王や貞任などの立役が得

意だと聞いてゐたので意外だったが、早くから女物で修業して、この方が専門だと云ふ。淡路では立役遣ひと女役遣ひとがはつきり分れてゐて、兼ねる事がないさうであるが人形遣ひの数が減つた今日、兼ねる遣ひ手も現はれたものらしい。この兵吉老、一座での地位や持役の上で云へば、文樂なら文五郎といふところだ。遣ひ人形の情に引かれて顔面にその役その時の表情があらはれて出ようといふ熱演ぶりが身上であり、愛嬌である。

引田咲司といふ遣ひ手、この人はさしづめ紋十郎株か面立ちまでどこか紋十郎である。この人こそ女役専門、初日に政岡、お柳、初菊、宮城野、お米、おさん、桂姫と、一幕も休まずのべつに遣つて出る勢力には驚いた。

立役遣ひには片山茂明、片山義雄といつた人達がゐる。

茂明はもうよほどの年配らしいが、老實な、そして鷹揚な藝風だ。沼津の平作には、事新しく泣けたものである。聚楽町の梅由も好かつた。樂屋では中々の氣焰家である。

かうした上級の遣ひ手達は、いつも出遣ひである。二流以下は黒衣のまゝで遣ふ。だから一幕の内でも出遣ひと黒衣の遣ひ手がまざつて出る、たとへばすし屋だと、お里と權太だけが出遣ひ、梶原、彌助、彌左衛門、内侍などは黒衣の遣ひ手が遣ふ。文樂とは勝手がちがふ。それに一座の遣ひ手が数少く、どの人形も三人遣ひでは人手を缺くらし

い。人形が五六人居並ぶ場合、左遣ひ、足遣ひは次々と動きのある人形にとりついて遣つてまはる。動きのない人形は一人で支へてゐるか、突然姿を消してしまつたりする。すし屋の段切れなど、彌助と内侍だけで幕を切る始末だ。太十の初菊は、十次郎出陣までは出遣ひで丹念に遣つて見せるが、後の出は仕事が少ないので、黒衣遣ひが代つてそこ／＼に遣つてゐる。

人足らず事とゝのはぬまゝに、かうした妥協的な融通手段をとる事に慣れきつてゐるらしい。舞臺を甘く見てゐるやうで、不快な氣がせぬでもないけれども、この人達にはもう常套なのだらう。現に、どの一座でも「神舞」と唱へて神聖視してゐる序開きの三番叟では、翁も千歳も一人遣ひ（一人が人形の両手を遣ふ）、三番叟でも二人遣ひ（足遣ひがない）なのだ。この舞臺には、三人遣ひに至らぬ人形操の原始的な形態が残されてゐるのであるが、かういふ遣ひ方も心得てゐる人達である。所謂淨瑠璃物の舞臺に、動きのない人形の左が缺けたり足が缺けたりは、頓着に値せぬらしい。いつそ氣輕で、御愛嬌でもある。

咲司が玉手御前を遣ふ時、「芦の浦々浪花渦」のクドキの件で、左遣ひがゐなくなり、咲司は右手に人形の左手の柄をも持ち添へてグル／＼と兩手ごと水車のやうに廻しながら振りをしたのが、舞踊の型のやうに派手で面白かつた

その外、様々の愉快な異様な演出を見せてくれる。八汐が千松を刺して引込みの際、血刀を拭つた懷紙を政岡の鼻先に突きつける。政岡が顔をそむけると懷紙をおつつける政岡が襦の裾を引つばるのをぐいとふりはなして意氣揚々と引込んだ。愁嘆の件になる。「武士の胤に生れたは果報か因果か」で政岡は兩肌脱いだ後見得、そして千松の死骸を頭上に高くさしかざしながらトン／＼と足踏みして踊るすし屋の梶原が例の「小氣味のよい奴」の件で權太の頭を軍扇でグル／＼撫で廻す、權太が肩をさげ口をバク／＼開けるのはテレクサがつてゐる科であらう。そして羽織つて居る梶原の陣羽織を頭から引かぶつてつゝ伏す、忠臣藏六段目の段切れ、勘平の死體がつゝ立ち上つて、おかやがそれを支へた見得で幕になつた。「魂魄此の土に止つて」の本文に敬意を表したものらしい。

去年、文化映畫の「淡路人形芝居」に熊谷陣屋が出てゐて、小次郎の首を見ようとかけよる相模を熊谷が長袴のまゝ足下に踏まへるのを見て、演出の荒さ、稚氣に一驚した事など思ひ合される。どれも／＼珍らしいうれしい型である。何れ、向ふ受け一方の、馬鹿派手な動きなのだが、此の觀衆を前にした此の舞臺では一向に苦にならない。

此の觀衆、やはり老爺老婆が多い。漁師らしい顔の赤い話す聲音も太い老人の一團が花道傍の席に居並んでゐる。

人形の團七、鬼一そつちのけに魁偉なこの人達も、この人形芝居の前には實に素直な忠實な觀衆なのである。

梅の由兵衛聚樂町の段は、文樂にも歌舞伎にも小生未見のものであつた。正本も讀んでゐなかつた。こゝには、丁稚の長吉が義兄由兵衛の難場をしのがせる金を用立てようと、わざ／＼殺されに來たり、又、姉の小梅が見す／＼弟が殺されるのに、夫のため背に腹はかへられず家を空けて出るといふやうな、淨瑠璃の世界とは云ひでう、奇矯じみる人情や犠牲心が扱つてある。現代の觀衆には、文樂でももう鼻持ちがならず、歌舞伎ならいよいよ觀るにたえなからうと思はれるのに、こゝ淡路人形の舞臺だと實にピッタリ來るのである。人間並みの義理人情からは超越した由兵衛、小梅、長吉の三人共々、變に生き／＼とした實感に躍つてゐるのである。衣裳も、夫婦共黃八丈細縦縞の揃ひの柄がいかに情の深い仲らしく見え、淺黃石持の長吉の丁稚姿の對照も美しい。段切れに、夫婦が死骸を入れた蒔桶をかついで立つた姿にも、このいでたちなればこそその大間な味はひを出してゐた。そして、芝居の進行につれる觀衆の關心状態を見ると、ハメよう、沸かせようとたくんである急所々々には確實にハメられ沸かせられてゐる。由兵衛が長吉を切らうとしてゐる。小梅が門口にかけこんで來るとたんに長吉が切られる。觀衆の息づかひに、緊張、期待

失望、その都度々々の感情の起伏が、明らかに読みとれる
そして自分も完全に、この観衆の一人であつた。

この舞臺と観衆との間に流れてゐるものは、たしかに
「文樂」以前のものである。人形淨瑠璃の原始期の氣流で
ある。目で見る淨瑠璃史がこゝにある。

人形の衣裳にもまた異色がある。一座は役柄一ト通りの
衣裳を揃へて持つてゐて、狂言に應じて着せて出す。それ
が、文樂や歌舞伎でのお約束の着付と違つてゐる事が寧ろ
普通である。忠九の戸無瀬は赤無地、小浪は白無垢の着付
と見慣れてゐるのが、こゝでは、戸無瀬の黒地にコボレ松
葉の裾模様、白地に銀で芒を縫つた裾襦、小浪は赤姫の拵
へに同じく白地に花鳥を大きくあしらつた裾襦、このやう
な二人が並んで出る舞臺は、いつもの山科閑居の氣分に遠
い。すし屋の權太もおなじみの辨慶の太褌でない。田舎褌
の着付を兩肌おしぬいだ下に、白と紺の太い縦縞の襦袢、
それに胸當の黒いのをあてゝゐる。この扮装にも、洗練を
經た今日の權太より一足飛びに原曲の權太に立ち戻つた面
影があつて面白かつた。太十の初菊が、始めの出に裾襦を
着、盃の件で脱ぐのが、歌舞伎などの型と變つてゐる外、
その裾襦が黒地に白や金で龍宮城、浪などを縫取り、袖口
に朱の飾り房をつけた異様に豪華であるのが目を奪ふ。こ
の龍宮の大きな模様が、郷土の匂ひ、淡路の潮の香を感じ

させてたのしかつた。その外、お里の町娘姿や、お米のや
つし娘姿にも、決して凡でない審美性を見せる。光秀、十
次郎など鎧武者の鎧には、特有の大膽な様式化があり、そ
して光秀の鎧の草摺には一々金で桔梗の模様を打つてある
など、念の入つた意匠である。總體に女人形の衣裳が華美
で、後見得をくどい程切つて見せるやうなもの、衣裳等を
誇示する効果からであらう。ふだん荒い潮風に打たれ、黒
い土を踏んで暮す島民達には、この見た目の豪華が、どの
やうにか慰めになるのであらうと思はれる。

併し、所見の今度の興行は、淡路の人形劇本來の面目を
傳へたものではなかつた。

素義連の咽喉自慢が賣物、人形は寧ろお景物だ。どの人
形座も、近年は此の種の興行に頼る事が多くなり、所謂本
場の阿波淨瑠璃を玄人で聽かせ、人形本位の通し狂言を演
ずる獨特の興行は稀であるといふ、素義なれば語り場のカ
ツトはのべつで、白石の揚屋が姉妹の名のり合で了つて惣
六の意見がなかつたり、沼津がお米の盗みから始められた
り、狂言の筋が通らずに初心の見物を面喰はす事は、近頃
のカット澤山の歌舞伎劇以上である。かうした事が幕内で
の不満とならぬはづがない。人形遣ひ達が總體何となくは
づんでゐない。舞臺に氣の入つてゐないふし、が多いのも、
元來旅興行のあはたゞしさと一がいに云つてのけられ

なさうだ。小道具、大道具類にしても、到底完璧はのぞめぬながら、又簡朴が生命の郷土藝術とは云ひでう、夕顔棚の段とさへ呼ぶ太十に夕顔棚らしいものが一つも見えぬ舞臺の氣のなさ加減はわびしい。

文樂と同様、淡路にも、人形遣ひの次代の後繼者は皆無だと聞く。この一座には、左や足遣ひの黒衣の遣ひ手に女の人までまじつてゐる。この春東京で新生新派の「淡路人形」上演に際し、招かれて花柳章太郎等の新派人に遣ひ方を指南したり、有樂座に數日間興行の機會をつかんだ事などを、この人達はよほどの快心事としてゐて、得々とその時の景況を物語つてくれるにつけ、郷土ではこの不遇にやつれてゐる姿が、いた／＼しい思ひである。

終演の幕が引かれる。金藤次も萩の方も、遣ひ手と共に歸り行く見物人に辭儀をしてゐる。

觀客中、年若の人達は、金藤次の物語りの中程から狂言の筋を吞込んで、はやくと逃げ腰になつてゐたのだ。劇場を出ると頭上は降るやうな星空、提灯でゞもあれば一層氣分の出ようところを、懷中電燈の殺風景さで、青麥の畑の中を歸る。磯近い道で、潮の音が高い。對岸の明石一帯一文字に明滅する灯が見事である。

三宅周太郎氏は淡路の人形淨瑠璃について不満めいた口吻を洩らしてゐられる。（「續文樂の研究」中「淡路人形探訪

記」）竹内勝太郎氏は同じく淡路人形が思つたほど古拙でないのに失望したと云つてゐられる。（民族藝術、第三卷第七號「淡路人形座訪問」）成程、郷土藝術とは稱しても、野趣横溢、素朴豪快といつたものではない。そして、文樂の藝術的洗練には元より距離がある。このやうにどこか徹底し切らない印象、原始と完成の眞中を煮え切らずに迷つてゐる感じはたしかにある。兩氏の不満の因もこゝらにありはしないかと察せられるのである。

淡路人形の再興の事が、近年地元で熱心に計られてゐるといふが、これから先幾年、次の世、島民達の鑑賞に耐えて行くであらうか。文樂ファン如きの、教養に根ざした古典愛好の士は、若い島民中にあるべくもない。あれこれと考へ合せれば實に心細い限りだ。今夜の道の暗さに増して自分の氣も暗い。

（了）

淨曲みどり會

事務所

大阪市港區湊屋町
二丁目山下民之助方
電話西六一六〇番